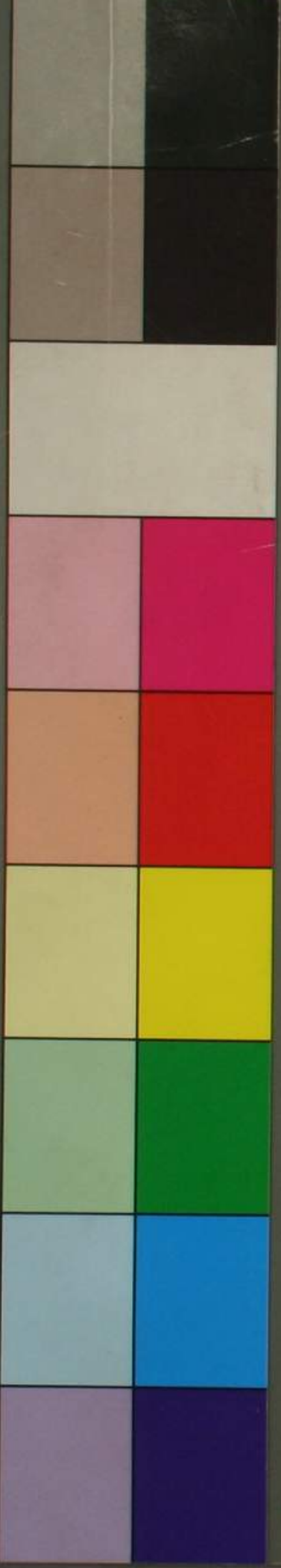


KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
3/Color Black



Centimetres
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

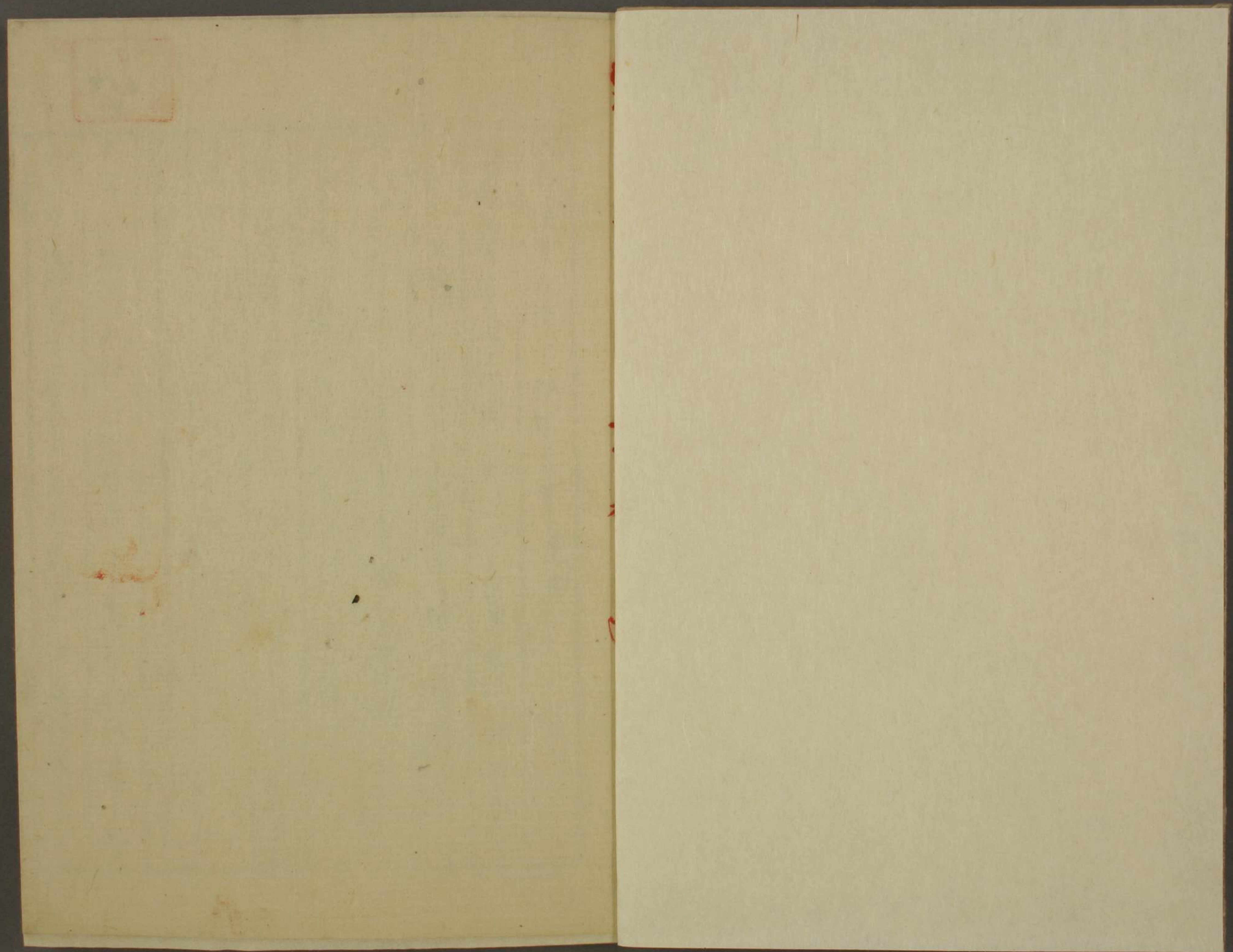
八代傳九
輯下快中桂
或雨評

1冊
600
90



百下六回ヨリ
百三十五回ヲ





特
門 4
番 60
卷 90

八女傳九輯下帳中之中 愚評

瀧澤文庫



好評
先主
不

簡端教言ハ女士の傳はかりの事あれハ婦女子も
しもさうありよのたあぬ者官もおなくハあやさうよみ
すくす(きり)わまハ甚得意にて再ニ熟讀暗ニ平生おも
ふとてふと竹付をせるものよろこばしき評およへりこハ
人のあやさうよみるへきをくくみていさくう者友の眼をお
とらさんとてあり

源氏物語なども作つとあてうとの伊備甚感彼にてわ
まきと雅信ハ一致といふ説をいへとも未ひとの伏せを
更いと遺憾あるよ是をうらんや先生よけ言備あんと

三行
三行
三行
三行
三行

わかれ雅俗を一致といふありよそハ別はあらずこれ古今
轉々來れるの語執力をあつてさるまで只古を雅と一今を
俗とせるの儀之の雅俗の論こそよ中居つて是く源氏
玉の小くは雅俗の論あるをあるの人木下孝文といふ
人の著儀を^草葉集といふ^草葉集のうち櫛のあつて論
せしは甚おのろし^草葉集の中居つて出でてその家の記を
うへるはさるのを罪ふべきことあましとさりとしてんようふい
るをいしていろいろせむこの雅俗今古のわちをみる
ははりまゝくつふのにか^草葉集の志きりよ古きをばら
れしるうあまのりよこ古きをふとくせんとして平安城さ

三行
三行
三行
三行
三行

くまりし後を方角いすて今の系をゆとくするうたある
よこの雅い大和の歌をゆとくして方角をよまれしる歌さ
へあり月ノ弄又ハ玉のヨハツケ又ラシモトユフ葛城山月
カタフキ又トアルハ大和ヲ都セルニその身もより歌りし^草葉集
右大臣を古きをえられしと^草葉集今ハ悪風といはれし
を居る解いさすうよみやあつて新古今をよといはるあつた
かや古をよとくせむとてすて堂上方の近來の御うを
近世凡といふめられしその近世凡よきんよあがねこれ
自然一辨をさるしるその比の風を中居凡のうハ申くま古
をばんとする身もあつて時代はつひて後世よりみい

あがんとてをくらひ明の七才子の古をきりよふとみて同
 をきりしるもたゞ一時のゆゑにて錢牧齋の七才子の詩を備侍
 といふ確論ありまや物祖來の七才子をふとみて復古せん
 とせしものつゝ今もその身を痛破するひとのおろきを
 もおのふへいされいつてもその時代をわきまへざるにわらわは
 うんとするの私にて全公論にあらずまはな居凡の學子の物
 氏の學凡とある一く漸く衰微す（きこう）あのみもあけら
 き（しん）らりつゝ和文の端（は）來れるまはりのしをせよと
 ぬることよして此輩（しん）よいされしるることく大正時代の文の
 ことは一時的の系に之兼好うつまつゝくさいをまよやちり

至言
物語

至言

そのあがらるる至言物語又長吟言文記あるをめぐりし
 たるは後世の七才子の和文あり自然體（しぜんたい）來まるとま
 をみるよしる文神ありと中居翁の甚あ（しん）いされしり
 近來中居凡むねとけま（しん）しる時も村田春海いさすりよ
 神の文をうきて中居翁の文よりいよく時好ありこれ
 漢文の力ありてそをふよとみて文をわらものよ（しん）ま
 へこそこの後文化文政天保の時好よりあへる文をかきつりむら
 れしるはこれ先生の卓見よてまことよ人のあはさる所
 されは後世よりみは中居凡の加ふ文の先きよいへる備侍の
 ことよて今の時代をみるよしる先生の文の凡ある（しん）きり

至言

一喜と述て
百首とらる
吾を吾国を
同母とて
多たは作
大門口
るをよる
桂のよる
柳世とて
る者か
言ふ
よの
よの
の
と

先生の文のあま物終方文化のこひひとて音訓あり
る中より別今の時好あり申居凡の文の源氏物語を
りて加ふる斗よて時好をみるのこころなり音訓ありた
るは万葉集をよめ代々の撰集乃あまいとあやこれ
雅信一致のつらふ文やあこといさとおきて今の時好
を後世よのこころいままつこく先生の文よありて万世の地
禮ともいふべき文なるへついでよい歌も志く冷泉為
村々うつぬよ山花の愛^言富の山は橋人のこれよを来ら
するこころいふくよむへとのあへるそいとこころい
これその時好をみるよこころて雅信一致あり文や古いた

ふとむへへ今をさだむへくはとらぬく僻見よお
ゆまふこころひの整言甚あひらくこころいさるあま
をのへこころいさゆる親伽の経文の教あるへこころい
をこころのみ

百世に回道節毛野二た士う何れおるよま又次角う馬
の是をあきこあすさまなまといまろく前編終る春の辰の照
應あるへへ又小文吾現八壯助ら出端も志くこころい大士の役
まはつ一人も抱ひあるその人物の意乃母真きこころ前編よお
もひあはして甚感ふら

前編トイヘルハ八輯ノミナラスサキノ
ヲ略ミテトイヘリソノユロミタマヘカニ下ニミナ

無

好洋

よりの文句例のことくうまいことありすして極とんと
ままりゆく文句のえ来神ある筆のあすことまでさうり
の苦心にあるまゝ一はまこと看安の再あうらう一再三熟讀
せうして一個法師のぬむりせしさまをとられてそのわけは
ともあきい例の意味ふう一後四ことゆふれい言新までそ
の律意現極しり

例のことあうらうげ度し馬も妙にあふ文とくく文の光を
くもふしゆらおろくみいけ四十九めの画、大法師
のさまいあうらうも幻術をつうひて雲中より現しり
んやうよみゆるい一美もいり

カハル馬ヲニルタビニ画ハナクモガナク
オボユルサト画ナクテハ場アタリナク

ルヘシ看安ノ文辭ニコノコ
ニツキテモタニリク

穂古

親其獨り小文吾親のあうらう面會して小文甥の名のりをすは
看安も落涙およへりこの文句は一朝の筆あうらうとい
ふ文句のあることといふも志うり看安のいふおよは文作さ
の^憎恨も^恨怨も^恨なすしなすはけは八丈呉是せし越の妙いよといへ
りこふておのあうらう又感心の一條あり先八丈士の次方を考
るよ先い信乃うかう一里見に入へき役者こそを一轉しておも
ひもあけさる幼色の親きあより一番小入らまてさるい甚奇あ
るよその親きあうらう又物語をつけて浪人とあされさるいとい
あふあきりゆて容易なるさる文章こそを又この場(程)よ

好洋

母書

くいつくして事自然のことくハ大具ををさうしてせられ
しるの事よて甚余韻ふり

母書

信乃石佛の地蔵堂よて米或時よりいまゝあるふく
ろをゆゑるよりと金額の所をつまひらふ一徳用
を信乃よ生辨せられし事もあつろ

後書

百二十八回け戻して先感心の兵糧のもこえ米これま
ての闘戦いもよりあえおとろして旅りもとあれた
米ありけろその旅り米を一粒よてもあまゝてハか
えあふ文されいとして兵糧のこくはへあてていこよとい
りていりあるを兵糧をこくりふへき佛坊あふぬは甚

難儀の場あふ人を地蔵菩薩の化身の一辰よりして是又
一事あふの所起向をてられし今この世の住者あ
ふくハ里教飲食あとの事ハあふくあふらうりあ
この人ハ何を食して命つぎらるやとおのふことあとも
まみあされりし事を先生の住ハ食事又ハ里教あて
もよく実よあふる程せられしこれらハ容易の苦心
あふまゝしるしと看友ハむさうみすくすうあふらふし
あふ遺憾あふまや

筍のあるを茶にもちひられし事もあつろことハ信の
お所もあつろむやまの世よいむことあるハわれも

評ゆて
佳妙

穩當

きりりそのことまでもとわかれしるいとこまうしこれ
例の實をむねとつらう、作者の妙といふへ、又、大頭
陀衣の白布をもちひて飯をくく、是れもちひられ、
るも妙といふ、糧の二匹の少苦心さぞと感後、
石地蔵も皆是我依姫神の神所為あふんと毛野う
約ことうせられしる、作者の素面目あふんこれまで依姫
の神より又、是れ貫同あふ

反對

角門のことよりし、朝重と福のあるところ、おも親
を信をつらし、素直な館へ親多信う、依、ゆき、
時と、主客の、ひありさして、いらの、反、對、あ、る、と、い、は
えいそ、又、思、念、及、對、を、い、ま、ん、と、て、穿、役、を、い、ひ、て、赤、面、せ、
い、あ、ま、し、ひ、あ、り、こ、も、そ、の、教、あ、る、う、い、う、あ、ふ、ん

穩當

暢利う首を朝重よりさせてその由來をとせうの別、
同、士、う、ち、ま、て、命、令、せ、い、別、ま、の、四、討、あ、ふ、ん、と、こ、と、わ、ら
せ、こ、の、一、匹、の、敵、役、八、太、士、の、辛、ま、て、命、を、く、さ、る、極、り、せ
られしるも、無、益、の、殺、生、あ、ら、せ、し、と、の、悔、え、ま、て、を、苦
心、あ、り、し、る、あ、ふ、ん、八、太、士、い、さ、ま、ま、て、の、殺、気、あ、く、し、て、こ、の、一、匹
又、十、分、の、勇、氣、い、み、ゆ、ま、の、勇、氣、の、さ、ま、ま、を、よ、く、も、う、き、つ、
ら、ま、し、し、り

未得の前編までいさし、役をりしをけし、
八

見巧去

よく説く……十個の法師の地蔵あること……
け地蔵佛はまた一役つらられ……の妙……これまたの……
み物之味なく……く敵を依……る……す……大
趣向といふ……又纏巻と又十金の首尾を……てあ……
れ……め……

その……の
百……
の……
……
……

百二十九回け一回石佛の由来……浄西父子の傳を……
れ……尾甚分明……一返の……
く……く……
きりよみる……
妙……

……の
……
……
……
……

の大……
もある……
と……
百……
……
……

積……

唐朝の……
紙も……
い……
遊記を……

九丁方精進の付假名トミミハサウシノ伊付ちうへん
トミミハ精進おちのことあましのこつふハいうよびなり

ワレ再ニ熟讀せシカド外ニ謀字ヲミアタラスユレ廉偏ナルヲラスイ
カントイフニハジメハ謀字ヨモシ心ナレトヤカテ妙文ニ心ヲウハレテウノハニ
ノ殿ニナリヌメコノ精進ノ一ヶ条同ニトマレルノミカ、ルユニナレハ
廉偏トナカモヒタマヒリ

落結氏の事を又説くことよく首尾を阿そ
、大い重戸は十念をさうらふことあともよくこまやうつら
とくしり落結家ハ八柱すまつきて切ありそまハ靈夢を
ふありことさへあれはくあくていそ尾いうことまで
又自評よいままするこれ又感後之元明きの伊端
こと感後

徳者

百二十一回八柱しり行列のとき長夜のやみのあけし
んことくいとめさま愉快いんうあハ行の字の
順もども感後あまごこれらハ修業二十五年の終極よ
りむらることあまハと妙と一時よんハ中こはくうり
あまよ何ら又は感心の趣はさうあへ

て小雨茶の礼といふことのあることよや筆
のついでよあせあへ
又いふこととわう二十丁方の繪巻文の面影
松平寺の伊希のことく敵役めきし中よもこのあハ
大切の所ありは画工の文を自看あへをらう

この年礼ハ
尾宿の料
まき借相
まき借相
田舎の料
この礼屋は
まき借相
尾宿の料
時々の書
れらう

いさ
子百五
月

先生いさこそとおしをうりなむら

古二丁木架の編さへすみあましてまよりの文句甚おの
ろしうくて八丈士々喜喜ひくもひとよあまむら
のうらりのところまよるは海原あよりこころまよる例
の字よぬけめあくひあ衣の事さへ一寸くれこころまよ
余の事いさよあまを又感心廿四丁白人料理より下の文も甚おの

又月いさもる海原あよりくれも例のぬけめあ
さて編村の城へ八丈士うゆくところあの方といをう
てさらくとうくれもあうくまよるきわさこ趣向のお
あしきを越まてうあまうりかききのいあけれこころ

いさとさうり海原

富山へ莫き集の辰こころて研文も其の編又、大く昔の
ことをあひひいせるあこれ又ぬりのあまき妙字もて孫ま
八丈士のあうらうこのあひりもてつきぬへきを又も金碗
の苗字より一辰の物語の糸口たひううまこころいとん
おくこころ感抜の糸あ

百三十二回

二丁方ニ神儒佛の意をさらりと、うれこころあ見甚おも
しうくこれまて、大くあ貫目もあり

京の凡をいさまこころ所初鼻先生徴義学士の名を

為情の時奴を凡縁せられざる甚確論也

城原与世希のつらひうゝ甚おもしろくは老人に役つて
て後回しとせんとの妙趣向さることあることと与世郎は借を
させんことあるうゝかるべきを船の中よりくされたる趣向ま

ことと業亦このとより与世希の海をこの人あれは大船の業内
あるともよくありいゝ人こころも事自然に出るうゝことと妙に

百三十三回志ひれ酒の趣向殊重なる志ひれ酒の水辭傳は
おろくあることと妙なりとて美妙なる縁はつらひれれといま
は八女傳つらひれ酒の水辭傳はまさりてとせざるものも
もよみ辭はまさりておろよそ二十余回の水辭よりとく

見巧也

見巧也

佳評也

三反也

見巧也

あるへくる事類の大著なる志ひれ酒のことのあるきも
ありふもくくしてうましくつらひれ酒の所英泥固の
あつめ商人の辰に趣似たるをその趣は一轉してすこ
もその糟粕をあらはれ新製の志ひれ酒味いとふやし
多人教の碎るいふ倫之看安もけ文はとておもしろ
志ひれをきらすも何んか伊一矢

雲玉の奇端こととあるは又前編はさきく
つらひましたる趣といこととて妙におもしろを趣をうり
るいともあるかきこととよこの作者の趣向にい
まゆる**深**のま砂あるへ

野澤三吉

親を侍と被^レ経み希^レと船中^ニまて庭と^りいあ^レ侍の
張^レ順と李^レ達とのおの^りけをよ^く一^つ轉^レするの^りか^らこの
所^ニと世^ニ希^レか^らつ^ける^りと^りこの所^ニ前^編八^十四^回
十^住川の^辰の^思息^まて^あ度^のと^りい^又神^宮川^の辰^の
の^方對^{ある}へ^しえ^來一^辰さ^ひの^又冊^のう^ちの^才の^大
場^{まで}懸^くし^きこ^めを^さま^せり^こら^いよ^の老^の者^看
安^も眼^もつ^くへ^し星^眼も^甚感^振外^の評^の詞^もか^ら只^い
妙^くと^いひ^のみ^す
小月形ノカレコレ村雨丸ノ及對ナルヘ三月ニ
雨ノトリアハセモ妙
百^廿四^回黃^金と^小月^形の^力を^与世^希よ^さこ^うと^りと^りせ
て^大役^を付^られ^るも^妙の^り又^与世^希の^志の^ひて^借せ

照對至吉

小月形実
村雨丸

見巧也

罪もこれ^もて^きい^れハ^一事^あ合^とい^へて^おせ^いあ^らう
く^役も^つけ^よう^るへ^し外^の役^者ハ^役迫^りも^むつ^く
う^らん^され^いげ^系あ^らハ^作者^の存^外の^苦心^ある^へき^う
志^ひ事^酒ま^てと^も人^々存^命し^てい^志送^憾こ^うと^りと^り
解^葉の^ある^へく^もあ^らう^りこの^所難^役の^場あ^らん^を
又^例の^玉の^奇瑞^まて^一事^あ合^のも^ちひ^うい^は妙^也
神葉ノ門モツカヒエニ妙 照^文新^{あり}て^い親^を侍^の一^条こ^さし^つ
う^あま^いこれ^ハ又^陸ま^て一^程言^をく^せつ^の老^尼難^を海
陸^あつ^つま^せら^れる^自由^自在^の妙^也と^いへ^く殊^々
親^を侍^の漫^心自^らを^づる^趣ハ^たれ^しほ^こる^めの^よき^い

見巧也

至吉真白
目旅服

評中の
伊保の伊
世の海
あま

凡そこれも例の信玄の老練心といふへ
百二十五回海城の一条中玉へまききでもいりあまことこ
こより便りかかるとよりて前回と保といふ人をと
きいその人の由緒もその時代といふ似つらきこ
とをまうけいして海城退治の切りまは親と保
文ゆつりて役廻りよきいまりこれよりてやとひねを
こしらへ中玉はそのよきをつげやる趣向をとらう
おもしろく又中玉のさまといひいとこまやうはすみのすみま
てれとるれこれ作主の伊保凡そて未だ有し折作
後世もゆる原切の作主のあかんことおろらうか

あらた
又保

古今物語の妙作までさらうつくりぬのうらやうり
あつた

至り
作主の伊保

いらこの傍の研文のこと後海澄の時海澄よきといはれ
るもよきぬけはとよて妙くともふ又山流かせると
いふこと時代よくあつらうの時代文は又山のみあり
ことやもすれにある人すくあこれらハ折作の伊保
ハ小事あれといとよき趣向といふへ
世一ハ再説といふ断よりたう二下をうりの文は應仁の
乱の中末をとらまはるハ甚名文勢と嘆せりえ末應仁
の乱中末つまひらうあらざる乱とてわいもあきい事

至り
伊保

好律
思世
二つとあり

て教ヶ身をへしるあれは實録をみてよらまへどころお
くいつとふる礼こそを中末よつめて倍の厚も入あ
きやよせられしるに容易のゆゑよあふ文はよあそらき所
等かうすくも驚馬嘆き
義尚將軍の文事をこめまねしるを貴人等せられしる
もよ一せの業人わら田よあをひきて益あき義政將軍
のこころほむれとも義尚將軍のこころうりよもいとまこれ
らに人のいさむるともうけて例の作文の老要体切よ
ろころへあかへ
んやその於に世への文や権あらうつけおつる

忠若三洲
このかこ
上ありの暗
記美の事
なほあま
まれの事
全事
ありま
既下ア
まらま
これ下
所七
正
ま
く
り
威

子み、この歌應仁記の初句はやあるとあり
て飯尾彦右衛門うらとせりこ初句あれや志る
とあるうら結句のバのてよはのうら工合よくせん
飯尾彦右衛門に常彦とて終書のやありて別
飯尾流の古名筆筆定家のここれうこのうらの
こも人のよくるを富永とせられ
ころの何よれしるやゆらことひぢら
巻の終の待歌とよあのお画うて新書傳の虎をうつと
といおららるれと虎のこころ傾城水滸傳金瓶梅香
とへ二度まで新書をひきされしるに定る即苦心あるとい

ある妙趣向あふんといゆことおぼすことありハ
文と、後回の茶板をまつのみ

細評いともおよひうきうきをおきて
先ハ略評の略評に下落せしことハ甚あふるへし
まつり十又丁をうりの略評すむ文義つてあ
く評うしきハ身くるくもあやさるる事
とその所いといふく南石をひせしまり幸の
幸あふんう筆のつひてよ
あつまりし玉の光によよてりて
うくれみのうさかられさうりり

平定海世
てまうら
うまのま
うまのま
うまのま
うまのま
うまのま

下の句ハ中文のうちうくれみのうさかられさき
とあるをとれるなり

天保九年二月古巳日

桂 窓

著作堂老先せら

さきこお休をもてせしことく成の成の元日ハ大
傳の新板をひききみし一奇あふるや又あふ
はあ成のハあ傳結局にむんとするも又奇
あふすやうなる名作ハ天の感通もあるものう

十一 著 著作堂老

この成のまき
あふるのま
あふるのま
あふるのま
あふるのま
あふるのま
あふるのま

程家信札

五案前

里見八犬傳第九輯下巻中

黙老拙批評

今年ハ日暮して早春寒多烈々々庭の内北梅の
枝もいまぞ蒼枝吐ぬよ東風春信をついて八の
房の梅の九輯のまゝもろり来りういゑも延
と繙記る尚よ拙妙なるを〜毎度の事といひ
あうふ何とも拙記詞よの齋表め尽〜がけまこと著作他
公認の何と評し〜又よとの〜まのさるにあり〜二
拙き評を後へ試むる〜小ぢん

十九の事簡端の教員言を極的実なり凡稗史小説

奇功新書
紀新書
二平
三平
四平
五平
六平
七平
八平
九平
十平
十一平
十二平
十三平
十四平
十五平
十六平
十七平
十八平
十九平
二十平

を讀む人の補おぎなとなること多く世の迂儒又ハ俗人の
稗史小説も無用の厨くり本としてそが文字俗語あど
を穿鑿せんさくするに無益のものと思ふ人も多うまは此贅
言ぜいご少く其の書家を披くふよるに但し此文の中なか小奇
切新事とあるに恐らくハ紀新書の誤字して筆
耕者の謬あやまりたるん疑

○百二十六回此回七犬士巖崎等いざなを俟つ有根荒川
布山の件とよく趣を書き置らまてしに扱奇兵の案に
用る紙旗火急の巻にて四句の文の旗を用らまてしは
小道奥に抱かかびあひく能あたるまししころ挿子の人殺奇兵を

見巧者
至者曰

見く二隊小川日るる所あり衆心一致せしめて遂小
敗走小むるの機を先つあひしりまうかく書めて性
されハ先の懸かぬまの雨と符合せざる故なるべきは日生
額師方を思おもひ寄るの志年立んとしりる時ちつとも身を
起さぬあまて子る像の振子を豫め着信へみせま不
切者の筆ふでなるは経稜茂林小分け入件ハ水辭傳
小梁山泊の藝ぎ今児注へ討うちの向ふ傍ありて志らも
山林と水泊との趣を能書分らましり

○百二十七回信乃等防戦の件ことみ皆趣を盡つくされしり
但し荒川布山危急の折ときハひくもひと解ときを馬小のせて

筆帳精空
天守の平
るんせい

大きに狼狽せしふ又は取まてい款の馬小堅刺経後をつま
ぎあくる糸利をゆり同馬あもいろくゆ矢を書分
らまし一切先の筆に惴利銃炮をつるへ較りする所あくる存
嗣波園大歸三の三人銃炮小申りくる加言りからぬ月水
中へ落くる後こましく如何なる趣向有へくや今
より候るなりけ三人の皮して死をへくは甚故に河
程あり石龜をあり歸三あり皆水小縁ある者の水小
落くるあれば死する苦なり水層を水小落志て死する伏
縁を儲けましむ妙にぬけ銃炮一方の三人を游りくる
みて沃い付けとも福十に又挺の銃炮の仕方なき所惴利

水は保ち
三三三三三
五五五五五
妙

みんのか
神非心

か味方を好せしめる大おより七武士等の初戦を不用防
戦することなまし挿子の大物な飛道具あると活く小
難後なる取款方の兵器あり款方を好せしめる大およ
し急難奔の雨あり風のいしく吹荒くるハ八武士を冥
助の神意の加護勿論なれどもあは親共清く五獲しする
薩摩張此玉の奇特小い形もやまうし大おしてハ破むハ里
見度へ獻呈してしつ小無くと思ふは不審ハまし先おて
いつら穿くるよあはんと思ふは湖所おおしてハ大具
是し安房へ赴く件世上の着官も小者們と同意おて
大お受けよあは凡唐山名茶の裨史小説家の説く所

好評

直探紀二の
姓の書記神
代紀天雅彦
の段、種々の
直使とある
事、その事
サカサカ石

水滸三國演義西遊金瓶の類百十回を以て長篇の限
とす志あるに八丈傳は百十回の餘りありて編述の應教二十
餘年あり、妙作前編より益新奇を竭し、宣小海
内無比古今獨歩の奇書と謂へもふらうとせば、殊に
能化院へ八丈士一宿する辰、宣初は毛野の庫裏に背小
ありて地蔵の二像と信へ物の境と竹叢の筍を以て見
あり、宣する智の字の玉小懸してよく、ユママシ、今此
後の件小ありある、幽四布、四白、おて紀二、ハ武篇小あり
紀二、昂小對せ、ある人、九四白、高敷あれども、其王小忠
あり、宣有物あれ、宣、けまども、紀二、猫ハ、して悪心ある

方、歴を
使、ト、功
ハ、心、指、の
紀二、を、同
ト、を、他、し
紀、了、も、差、子
もの、手、を、小
神、ま、の、敷、ひ
ト、を、た、平、
あり

物とも、ん、く、の、で、ま、い、ま、の、用、小、さ、ら、ど、の、ゆ、も、あ、今、の
紀二、ハ、の、主、の、^{テウ}家、^{ホウ}と、る、と、ハ、又、大、母、是、あり、ある、を、紀二、を、以、て
名、つ、け、ら、ま、し、ハ、別、よ、ま、^あある、へ、紀、れ、と、思、ふ、信、乃、が、徳、用
等、を、討、件、地、蔵、堂、小、懸、て、思、ひ、す、米、を、以、て、米、ハ、素、ハ、大
ハ、丈、の、流、が、主、君、兼、小、己、く、が、祖先、を、お、り、の、為、小、施、し、る
物、の、希、て、又、己、ハ、の、危、難、を、救、ふ、臨、徳、あ、ま、ハ、陽、鼓、ある、の、理
を、よ、く、も、説、き、こ、ま、し、^あ但、^あ此、変、ハ、急、小、起、り、し、^あゆ、^あ
ハ、大、八、丈、の、書、も、其、糧、の、用、之、と、ハ、履、き、く、く、難、美、の、場、あり
然、る、を、よ、く、施、り、の、米、を、地、蔵、堂、の、持、て、先、へ、^あり、^あ其
の、方、便、よ、り、作、者、亦、の、妙、智、力、最、妙、あり、と、云、べ、^あ徳、用、が

程
口
余

己が力を著せりて皇太子の兵器を拵てふくを(刑)是れ
武士の心すめとせりよふり又たにて出来女を終り
を付しをよふり出来女の名と同惡の者なりとも重
人を殺せしふいあづりてに甲斐にて刑をまぬれ
し如く亦たまにて有るせん聊勸徳心の疎なるに似たり
志るをけりて不用之に信乃が爲に討まし前後照
悉しておし抱ひなく能くはるる但しけ追福の
一件ハ大が道徳善行ハ中までもなれとも彼を食能
人ホに施食をひくよを解し願ふずふちり其故ハ
往用等が妬心の害をひきおしり善行を行ハ一惡

後て生むるよりして梁の武帝放生の切徳の有るを達
麻子の善へもまゝにて善くも悪くもハ害を生ず
るいま免を承さましりなりん免

見
お
ま

○百二十八回大士や海窟の辰小糸を囊小入れて其を
ハ旅人高窓のまをとも成るべき老婦心なりん免糸の
ふ足小つきて笥をとり又境をゆるる毛野が昂智の働
最めてしり又ハ大の野陀袋と頼小糸を(給)れおし
も其理なりんて高窓の妙言は小糸より相孝嗣等三
人の死を以て道節ハ生に毎の首を斬むとせざるを毛
程がいまし戻もんぞしり生に毎を殺し終意なりんと

疎しは意を慮のまは皆くそ人との字は質を損しおせしむ
毎篇なるうら意味貫きて妙し小山大史次郎が荒寺へ来
る件信乃道節が指月院にて武田侯を侍交と事お似
しまこと能頼を替はましりついで侯の自ら賢士を尋る
ついで忠ある大夫の実をを探り小来る功方を能介たれり
叔三門の扉を開けぬおての御言をを極せり親を清が使せ
しは盗の門あり大戸を開くせしる其理も然なり又お小
て門の扉を開きて小山を入きて八士の威勢なり又
何ものなくして小山のくまより入るば小山の勇字是ら
ぞやをまうさげ三門破く傾きたる故掘りくくやより

入る越三門の破却をいそめて朝重の意を枉て後お所良
はの志入へてめてししおこまてハ朝重をおとて書
しれをままにしして書めてわけハ朝重いしし魯純小
思ひるくハ小朝重進ミ来る所おて樹下小孫糸れし言新
二方の僧侶を尻目小かけて餘くと行有格よりハ大馬
に對面の的慶寺小席サ庭なきことよりてお草平を
用意したるなど脱落なき所をハ大八士名も感
させて朝重も唯なみししの人なきぬ所を着官に
あはせしハ大よし備利が首をのししして別九郎
小孫糸れし子細を仔細ハ士のいさところりをものせし

好評

もぬけぬあし別九帝の名はほろふより侍分の
者にあふさふ位の人ゆ^に別懼の心をなして別九帝と
名付し然但し惴利のふふをより正木以下三人の人
をそこあふたまはたふふ人い遠城ぢれともまふ地
惴利を八士のふふ教させてい、大の志ふもなるなり然
るを別九帝といふ者にあふるも酒自のふにて将ふる
ふて惴利いふよく言甲斐なふ志まふあるよしを
知らせられくる大ふよし

○百二十九回能化院へ未得来りて佛像の切力を
とくあつしく抱ひあしえは十餘の地を芥は能化

院小あるへき、仏ありて且結城の祖先のなるふ達られくる
勿論あへて佛をえあもふまし放却て結城の僧侶のる
ふせまし、大八士を助けしより又足寄の奇物ふよ
りて結城君臣の信をまし能化院を取建るあふ皆
始終事を行てとく無難あらし、てむ極せし又十僧
のゆに津西の奇物あるゆ、彼は事基のふの口取なり
し中後能ハ神餘がふの口取あり、口取にもまの
照り不肖ありて忠節のある事、是亦勸徳ふかふ
なり、津西の忠臣にして又その影西の孝子を
生したる但し忠僕孝子修ふあふ、て後の事

至言至言
多ふなり
別九帝
夏百目

い送城小僧もとも父の威儀の果を得子に匹又にて
て権僧正小僧に任じし末あつとも悪しとせむや
後有とも自由なるに匹又少て草木と修小村茶人いま
そく送城始りらん死ね末基土の白骨祖公の力あど
そまうにけしあふあらんいこうあり又る佛の下に埋めし
を今新ふりり穿た人もふ糸あり然るをもをく星
額がめて束て渡せしあてしも極同なり経後素頼
等の病死して終ハ罪なき孤を立て有切く家を立
しも至極せり徳用ハさしも大カ強剛の者の比の
めくと遊び放たましし定めつけ後又何ぞの時

の用おちるん下條丸とあつる終化院再興の件より素
の始終事々物々皆緊要のりあてあしも極同あつ
く評せんハ極りにくく志られけ評ハ先男一つ

○百字圓、大八士安房へゆく件にまの事果し

まの初手に徳州へ立寄らんといハ人情実義を極せり
一俣城里見屋父子の季基の送骨を送る件ハ送
若修福是との事を追ふためをさすくりあて佛

をへのせぬあてあしくの佛ある書よりくき場な
り愁るるを事々物々しつも極同あつ終くたあを押て
字を付らまししる必云ハ徳川の茶店少て八士の、大と

命る、時城川下の分流も正木等の處をわけて見
よといふ所ありとて、折目あり、里見侯延命寺
にて追善の件、妙文の例のことあり、大徳侯の仙事
を同前より見ると、讀めて、折中に、寺中、小阿る
こと、一、句、編、中、に、自、注、せ、ら、ま、て、あ、ら、さ、れ、し、身、
とも、實、に、結、城、に、て、他、の、事、あ、て、の、追、善、日、ハ、大、の、自
折、あ、り、て、事、あ、り、と、言、た、り、又、折、あ、り、て、ハ、玉、君、祖
先、の、仙、事、に、て、志、も、傾、内、あ、り、ハ、事、終、主、た、り、折、の
改、牙、を、終、書、命、ら、ま、し、し、道、九、實、小、自、注、の、こ、と、く、重、後
の、こ、と、く、思、ふ、所、有、り、多、く、あ、り、と、思、文、が、種、小、小、使、は、

るにひがきへ里見侯よりの賜物の月小病をいふ
小朝鮮人參を給ふ所も折目あり、大が徳人
をいそがして出立つ根を衆人の情をうけて能われり
○百二十回付件、衆人の幕を移し、八士の里見
侯へ福の件、少て愉快いふへくも折目あり、但し、折、の
能、あ、り、ハ、二、三、年、あ、り、と、て、額、向、ら、ま、り、折、目、あ、り、強、奴、り
の、末、留、小、あ、り、へ、く、既、小、名、と、り、唐、山、小、説、の、巨、碑、自、た、る、水
辭、傳、中、に、梁、山、小、説、を、い、ふ、と、て、百、八、章、家、傳、の、そ、ろ、ひ
と、後、ハ、初、卷、の、能、意、之、へ、依、て、七、十、回、後、ハ、別、人、の、能
の、根、小、説、者、あ、り、也、智、力、あ、り、に、お、と、ろ、へ、な、り、

小字も兼多しあはれ、八丈安房へつとふたまはる
早そふにて千秋樂あはれんと思ひつといたて送あて
又く金碗氏を足利物軍に請ふ新奇の妙業をおよ
れ物皆妙ふありて奇く妙くあり結ふ、大分伏姫の
富山の石屋中ふ入て強経をる八丈の生身もけ岩室
より生し八丈の再ひつとあふも皆けい屋ふて志くも
、大分志を果し、たふ事終始通して妙あり、実ふ
け新の他志衆他ふ超過したる所企及ふへくは
とあつなり、又け処にて此金碗氏の説あはれして
い実ふ、大父子の後あはれ志むるの遺憾をいへせむを全

編纂要の所好

○百三十二回金碗氏を京都へ請ふ件、大分あかしく
論する志始終貫きて名實利慾のあせざるが家
人の情をよく写されり、又里見侯の諸侯へけあて
、大分子ほふせて唯金碗の後を建人と謂ふも
あふけし増し、事を足利ふ請ふ不飽して京
都の虚実を探し、志むるあはれ事、兩要あて感心
あはれし、伊も親き情う語ざるをゆきて又作あも
是れ親き情をやらぬあはれぬあはれ志るを、吾理
あはれぬ招き事を設て是れを向へ説くを、あはれ

見巧夫

る実不名他あり八士小同く金碗氏を犯さず
も獨者書う里見の爲ふせし而もなうて神傳の後
の棄しるをあらはれきて八士をひとく氏を與へら
ましるふ其の仁心實意あふりて同くく又あり
ら八士も他姓を犯さずするといふ人の傍卷の爲小願め
傳者の自問自答せらるて疑を解れしるま極よ
ろく延命寺の後任ふ人念成を月し忘るも念成の
出處ハ上徳ふ成村あるよし事つても極ひな
し妙く是考にして愚按るるに親善う是あり
先にて荒^狂平つ備傳の叙にてハ大くく徳用が

見巧夫

猪評ハ

伏線

どが妖術ありと虎を斬おせなど云事にしてもあらん然と
思り争なり系部へ侵する所ありと思ふら大川の伝を
形もあらはれ是水練小列しるるを思ふるともあら
そるい後小大いを救ふ伏線あり又小文五祝八大いと
送別のありて道路の難難と盜賊杯の害を説きとし
旦那會の人情を綴りて練る不を極せり^む練言ハ
語ハ修練^四流^六布^七等^八小を伏線なり^九然らんめハ下帳
のりおありて大に再ひ島山等の奸詐小を述のりあ
らんと思り争なり此伏線小もやと思りるお又旦那會
の人の戒ともありてよろしおと思ふる思ひて大い

不従ふるを義実君の父知りて我之付てをいせし
おして人を罪せぬ仁義の意をよくいふれり此
仁心あるも又謀るも幸あり使臣の災をいせ
る助けりしを臣の思ふのあやふきをも助け又大
江の難をも助け山津水路も二万の危難を解し
り年四布ハハけ振てい堅要の人おて思ひて来りし
甲斐又ありて大に忠し

桂海と口
事よ
神

○百三十三回四九次布り船を改る件初ハ自強く
んせて又大きふおそれ大いをしてゆめさせ人殺を
引かて山路は難なる謀妙ありけ件水崎の事

高の楊志等をさぐる伊あれとも又よりハ又巧みなり
大いなる事なきも水路小別ぞして水手船工等
が志を破らんゆを思ひて止るをいづを求ふ意なる
も極よるし今この世運も又かき事多ありけ辰の妙
ハ大い九歳の幼きにて仁字の王ある上に孤身にて
再び素夜が城を破りまねをい押させし袋の物を
さより安ありけ伊あてあせんおれ七丈士の程この
難苦を嘗てせし大いなる事なりといふあれ
ども大いを通りのゆにて危かかせてハ大い威
勢をくく小老あまり依て水小別なる処あて海賊

この心苦
唐土大寺
せしむ
かた

の疑ありせし海賊を思ひあどりて修羅丸船なる
小危ふきし小慢心の戒を含み又て小文吾う送別の
一言小思對せさせたり又後小親を傷く相おも慢心を
後悔させしる前後然とくのありてよえ

○百二十四回は処を百二十四回と書しの誤り
んをの舟の大いを助けし上ふ金ををうつき上
けし月形の短刀までえゆしおも抱ひかし又大
いも水のふ振練るる有志、押志づめらるべきをを書ま
の力して浮て沉ぬも妙あり修羅丸船と大いが水中
の有根の善い信乃か小川の傍ありか小いあてい出

舟

大舟の善いを助けて助けぬぎあていてい舟の
が大いを助けゆし善人の助けを得悪人の
助けありても助り疑き、勸懲ありに明なりむの徳不
て大いの沉まさるる而もいふはありても衣さえよく
乾く不など能心を利しましても思文等う山津不
測のか勢をゆいる有官の字の付ぬ不あり、查勘を
小一度の思文を任させしる海龍王う大いを危くせしと
同しりて凡庸の賊ならざるを知せし起ありかる
者あらずさしせば決然賊不集ましる人のいましる人とも
えべし故小賊も智あり、勇ありて普通の者ありし

見ゆ夫

ある日本の
評し
第九卷下
世の上の所
云々
見よ
忠告
云々

る所をあらせし大よし相此小説を生挿し肉小綱
の聲源八といふ名に云々是は石鳥居が以前の撰
の名もまゝ綱の聲源八といへり是は必要なり
おも出来介といふあり又安西出来介といふありて同
名の人おも必善人もあり悪人もあるをあらせし
あはれん全訳文冊七冊の終篇の小冊子に同名の人を
きをよしとせん大訳乃書小引してい彫るるある
もよし水滸傳小百八人の中あてさへ同名の人を
いへしまてや其餘の人小於てや且長篇の
肉あて強て同名の人をよしとせんとせし求めらる

見たり

て却て悪しき人又も同名の人をあらせし善人とう
斤切ていふつなれとも種々小轉化して着官の云々乃
付ざる者もある振ふつる云々小作之の妙と思はる
ありこの著書山の隣尾伊道のかかりいともめてし
名たる唐山の小説水滸傳なども宋に新義の折あり
賊中小義士ありて助けし作皆一途お生て重復
うとあは振あり又西遊記おも三流師徒極籠りあは
是非認善の救あり然るふは八丈傳い大士宛義の
場おむて眼もあはれおむ伊道い願言小
て賊を追追のめし幸延譽傳おを救ふ不用云々

ておまへ〜場事〜無理なら〜して奇妙〜是と水滸
以上の稗史も固小強盜あれど礼世〜して領主是を伐
ひぬぢ〜賊徒いよく驕大おぢる頼お作まり〜礼世と難
ふ〜の腹主恙〜くまうらんや為の他主〜をあられ
〜や隣尾の賊追伐〜封内の庶民を思ふ良主の志さも
有へき〜して他部お〜する不最珍事〜いふ〜城和
伊近〜も〜南朝忠臣の旧縁を思ふの餘り感状をとら
せんといひ〜する事四部が垂言せ〜侍従人情を写され
〜う叔八士乃〜り先〜して遊遊お會せ〜領主由因
縁城隣尾等の君も〜も〜同小優劣を介て人品

を別〜して〜する勝手おもま〜扇谷千景等の君の恩お肯
の階級を介〜して〜誠お奇〜妙〜こ

○百三十五回思文おけが安房へ快を巻せ〜ハ是あ〜て
ハ姥等の切も〜ん〜ん〜ハ以前の玉を惹ひ〜する矢を債
小〜〜あ〜〜して七士の事おけが〜る〜く〜と云〜
皆戒とするお〜して勸善の志よく融〜して是〜し
又〜〜深〜して海賊のこ〜ん〜謀伏〜して土地次第お整
冒せ〜事〜おけが〜切〜と領主の意むの〜と〜きたる
不浄姑〜とのあ〜して一ツも振目お〜〜野劉強盜の碑を
〜る〜〜てお〜るハ領主の所行より〜作者の〜ひ〜は

きて他他小類か。お軍家より始めて三管領の家
 督論のり実ふ久説めて後の戒となすへ。お軍
 より初て候く時のある程を論。政元政長は時の指
 針にて又まきか宰たる香西彼六のりまふも説
 及不せ。以後小わのが系地小押留せざる。張本の
 縁縁源あるへ。但。義尚公は明敏の者なり。権臣
 のる小歴上務せ。まて志をのるふより。なき振定る
 をま。今書き。一に學問をを匿さざる老成をあるへ。
 氏を賜あるり。お。なく。所。うと。わのき人押留し
 此の系地の者程統御のり上下とも流しせ。比な

るにわのいあるあり必びそまのりあく災厄の
 託り。に。お。あ。下候の下の初書を繕とら
 ざれば書るい云が。りれど。新も存る也
 初まを。ハ。わ。九。下。候。の。中。を。繕。れ
 関せ。よ。ろ。お。バ。ー。は。い

ま。を。し。花。ま。い。お。を。書。窓。の。の。り。
 ま。川。意。り。あ。い。ハ。ッ。ゆ。は。の。梅。

この三冊の評ハ評テ且書セルニハねも主客照對反對
伏線有とをん物さうノ敢有右ノ出る有る一且作者の
用意ニ要際のおかしをるるも、そのまゝに至るの妙評動
くをきまよ一箇の知音といふ、この月動海全集梅
五集の評書ユウ評見り

戊戌夏六月念五

著作堂老逸

主客の辨
精妙

ハ大仍進評前評終りて後まゝ、斯やと思ふるを返
て家山再ひあるす、一俤李基進善の件より送骸里
見へ帰るる件ハ敢る件を主として書れ、る先能化院
ハ主として一正寺の客あり、大和尚ハ主として末海老僧の客
あり、大と末海の道徳を以て十辨の地花茶の利益を議
し、お、一、大と末海を主として影西念成の客を、二、お
し、一、お、大と末海を近命寺と能化院小寺主として、三、お
て、お、お、お、依て影西と念成といふ者を、四、お、お、お、
最妙之十辨の地花茶を主として、淨西の地花茶の客を
り能化院の仙地より、五、お、お、淨西の地花茶

勿論

ハ未をかくしてハ士を勉る事、皆妙なり是等の名僧
を伴ひてふお授意して或る奇特を現してハ士の急意
を降き、或ハ餌食をおしてハ士の飢餓を救ふ弱法師の
大者ハ老を急を告げ、星歌の大いふ事を知らせし、
文をひきよめても、つゝも押ひあぐ妙之地蔵の以中と頭陀
代なる米を成るる器とあり、四句の文の旗々疑義の道をとる
一ハ奇ハ叔祖仙法ノ奇蹟をのべし、星見彦父子の祖を
追福の光を増せん為ると思ふに、けふに、くも事ある事
星の枯骨をおりて、大々安房へ移して、あまり平和なる
て先の安房にての仙事ハはへき、實ハ徳用任判の

此評稿

後ろかく聞せられたり、我々星見君臣の信実帰依のまへも
ありて大いよ、孫ハ大ハハ士の櫻とありて、此書の眼目編
中の大意おもしろく論じ、あれどもせん坊あとの妖賊を
仆せし候ハ、大い取て、切といふ種の本事おもしろし、是と
ハ大が同じむる種の本種を、いふ事、おもしろくあらわ
ハ大が大切あるせざれば、唯是とハ士のあひふある事、の振
又、大の切といふ、僧徒の事、切徳の仙共の奇蹟なるハ
此ハが家事おもしろし、ハ仙事ハ四回の著編あり、な
又種ハハ士の約く、いふ事、前ハ振るれども、水垣ハ義
曾の老人あり、又ハ大と、つゝ、いふ事、いふ事、いふ事、

あつち
隠微あり
と、いふ事
作らる

手控ておんハ飾り小不致程あり。只奴ハ世々者せし見
 を尋ねんハある處々々々忘るるハ又氷垣を病まふせじふ
 作らハいふとも云んが今夏仍ち室性を推ふものなり
 義勇の人ありて義小もやる人あり。且ハ老人ありて経氣小
 も阿る由ハ上又にて阿るハ是北結城ハも付て行くハ又
 里んハも送り仍ハ一表夏仍ちそあへ行てハ志小持自
 あり。仍ち仍ちハ夏仍ち病をわて仍ちぬぬ聲のハ
 船も女持ともあるなり。上城ありハまづけ先也て何う
 うハ不あるハも知れざるなり。

傾羅ハ帝宮う大江を謀る件よりハのたまてるおろふ下

戸内屋の競向奇妙之海を養斗あらハトエハのうる魚
 く又磯栗子のハあるハ海吾ハのちまん志うをあ方ハむけ
 くるハ戸内屋をわてとちハものうさぬ。水辭の奉高
 よりハ一版うハもなり。掛け件より。後隣尾の賊徒を追補を
 するハ他代ありハわに目前にて將取ら。是る場あるを又
 六人の賊いつくハれたるうんぬ。着官をさ。疑せ。後
 よくハ。官方敷金。して。を。屍を海中より見出す。と。隣
 尾の別度。の。よく。仍。屋きたる。をも。見せ。又。ハ。美。の。に。して
 も。斯。る。ゆ。い。ま。あ。き。の。あり。一。俣。城。の。能。ハ。美。の。を
 実。の。ゆ。い。て。書。る。由。へ。着。官。を。一。不。感。ぬ。り。き。あり

是のては内ふおのづと心書中にいりて実りの如く書
るを左のけてんてまめて裨史よるに字の付く
如く着官をも裨史中にまめて見せる可他不敷るく
古人うにこくひ多かき被ふ感にお堪あり

右黙老人追律の法を敵干上層畢

戊戌夏六月廿五日

著作堂先逸

使者傳略評拾遺

京 氏全新々評

此書の及端一美級の弱點を青紙裏にいれしるは故人の傳
 を去集めまゝ表紙に併しし一紙一ものうまゝの史著演
 了れ曲すの了れ^{とれ}して大文の息案著佐も著者
 堂と其の著者の及れい画七ハ漢亦英名にて字六ハ谷人會
 川あるへ一弱點の及るハ畷耕録とんくうとんく
 奴を弄り奸平貞方主従あとも悟りて脱藩石を分りたり
 ませしよハ案を被るるを^{とれ}と由井ら漢王て介傳のも
 のをを放せハ古くの文王て推考ありん^〇貞方の時を以
 て母を死せしハ羊直ら死とお似て同くうらハ貞方の

この精評ハ
 此書の及端
 一美級の弱
 點を青紙裏
 にいれしる
 は故人の傳
 を去集めま
 づ表紙に併
 しし一紙一
 ものうまゝ
 の史著演
 了れ曲すの
 了れして大
 文の息案著
 佐も著者
 堂と其の著
 者の及れい
 画七ハ漢亦
 英名にて字
 六ハ谷人會
 川あるへ一
 弱點の及る
 ハ畷耕録と
 んくうとん
 く
 奴を弄り奸
 平貞方主従
 あとも悟り
 て脱藩石を
 分りたり
 ませしよハ
 案を被るる
 をと由井ら
 漢王て介傳
 のもをを放
 せハ古くの
 文王て推考
 ありん〇貞
 方の時を以
 て母を死せ
 しハ羊直ら
 死とお似て
 同くうらハ
 貞方の

見ゆ

如許至吉

其身を虫取し、美隆にお渡しとてこれのこゝろに山といふ
 仙娘に見えし、^二夏^一て姑麻姫う九十九娘に見えし、^三夏^一て
 又こゝろ姫う美海を射し、^四物徳^一とて惣管中へ入し、^五夏^一て
 子也又心懸い啼のこゝろて破貞者いふ事なり也これ他者の
 月ふりて八女傳もあまゝ、^六阿ま^一と作いふ事なりて知
 へし、^七三女^一と介う死さるゝの折強詞是れぬ^八夏^一て^九ひ
 へしこれき大あまゝするもの女を害し、^十大人^一も
 るく助け、^{十一}夏^一てい勧懲^一たうい他傳とんぬ新もて終
 吳者様、^{十二}ま^一りし、^{十三}夏^一て武松此女死高家傑まゝ女を害
 へし、^{十四}病^一あれ也八女傳の碇いふ妻子も同し、^{十五}夏^一てあれと

終吉他評
みこころあり

好洋

一もの三教書も虫とらされし、^一夏^一て何を何といふやうんと
 一茶店のお菊うわとと者官、^二夏^一てぬるゝ女志のおといぬ
 をほ免さるゝりて八女傳の初集とすぬらけへかゝられて
 とありて、^三夏^一て純平と名を預し、^四夏^一て同し、^五夏^一て若人
 の死のあ月を病し、^六夏^一てあはれ大英語利おの夏をか、
 ねさるゝ、^七夏^一てを人、^八夏^一てぬるゝ、^九夏^一て野井の地蔵堂此
 伝石の阿と井、^十夏^一て、^{十一}夏^一て、^{十二}夏^一て、^{十三}夏^一て、^{十四}夏^一て、^{十五}夏^一て、
 白を虫取し、^{十六}夏^一て、^{十七}夏^一て、^{十八}夏^一て、^{十九}夏^一て、^{二十}夏^一て、
 よあを目にく、^{二十一}夏^一て、^{二十二}夏^一て、^{二十三}夏^一て、^{二十四}夏^一て、^{二十五}夏^一て、
 阿らひ流し、^{二十六}夏^一て、^{二十七}夏^一て、^{二十八}夏^一て、^{二十九}夏^一て、^{三十}夏^一て、

青非堂蔵

猪河ぬ

則ち心算の

真面目

甲より下至

百五十五

て十堂

若子う難癒はこゆれまきこのひまで四くつ後のうさゆ
 報向あへへ
 ○九六娘小教の辰神社仏宮花英を
 懸して凡丈信を云く竟高の竹より傲さしも及ハ
 にく世濃文辰居ら備く欲く天堂の快楽を欲す
 云く金云む句感んく遊辰と輝武くあ火の死いとせ
 罪あり甲男女あるにせ死骸分ぬは辰回報向のある
 ○信丈を指りく悪漢を若く二布あかんとい誰も氣の
 付ぬ妙へ
 ○仲はの縁合まで海金を盗ましく長総小教
 二布を縛り併せて若くめ報向妙く亭主の利を賢く
 此奸ま淫ぬるうふんても氣の毒あるやうに美こくら

まをまて

見たり

見たり

見たり

あ妙へ
 ○小教中山の辰小人の空鶴くつてふ良れんを生し
 くる小教二布をよく結果くる子怪くて妙くその中へ管笠
 まで首飾を隠しくるこゆるいりく
 ○彼ら書純梅ら
 長総を佐と白服する恨の早服さこの文句よて悪ぬの
 情態を教せとも巳集をんきんぬの付ぬ妙へ
 ○第三集
 の娘と艶女を何うくくこととあ何うくくはをくく酒あるへ
 ○第四集脱獄の辰板壁の中へていとまゆるさくさる
 くる張籠を推しして押さく去向の石に破れて首ハ
 解すくく蒼花くく顔の色もあくあり妙く
 ○若くおを越る辰色おといよく虫かえておまで後

昔非堂藏

徳吉

嗚

其妙之志う〜皇^天を好愛を助く〜以これハ毛野と
 加え〜志うられとゆ〜てハ毛野〜智術見ハ只且ハ
 時候も遠ひ〜これハ作者の股筋ハ奇うりり〜
 松の好悪之集までハ誰も其の付ぬを四集にむりて歌〜
 とい^取向妙之件ノ二人ハ松深情史よりお深久松の深婦
 を孝子貞女に虫加え〜るう作者の用意〜あ〜されハ濁を
 うちて其面目を歌〜るものある〜
 使客傳略評拾遺^終
 ハた傳略評
 初集二集ハあ〜ある〜あ〜ねと志野の評せられ

評しゆ
至聖且心
見しゆ

見巧去

此ハ第一集より出〜
 板井鳴子を尾と爲め〜
 白〜を注して〜倒の妙又是の〜
 多られ〜言初あれ〜これの〜
 候條の〜言も又此のお刻あり〜
 情を〜るかふ歌〜
 いれ〜
 よ〜
 下梅の樹下〜を埋め〜
 の文を歌〜
 〇第一集書〜
 〇第二集
 〇第三集
 〇第四集
 〇第五集
 〇第六集
 〇第七集
 〇第八集
 〇第九集
 〇第十集
 〇第十一集
 〇第十二集
 〇第十三集
 〇第十四集
 〇第十五集
 〇第十六集
 〇第十七集
 〇第十八集
 〇第十九集
 〇第二十集
 〇第二十一集
 〇第二十二集
 〇第二十三集
 〇第二十四集
 〇第二十五集
 〇第二十六集
 〇第二十七集
 〇第二十八集
 〇第二十九集
 〇第三十集
 〇第三十一集
 〇第三十二集
 〇第三十三集
 〇第三十四集
 〇第三十五集
 〇第三十六集
 〇第三十七集
 〇第三十八集
 〇第三十九集
 〇第四十集
 〇第四十一集
 〇第四十二集
 〇第四十三集
 〇第四十四集
 〇第四十五集
 〇第四十六集
 〇第四十七集
 〇第四十八集
 〇第四十九集
 〇第五十集
 〇第五十一集
 〇第五十二集
 〇第五十三集
 〇第五十四集
 〇第五十五集
 〇第五十六集
 〇第五十七集
 〇第五十八集
 〇第五十九集
 〇第六十集
 〇第六十一集
 〇第六十二集
 〇第六十三集
 〇第六十四集
 〇第六十五集
 〇第六十六集
 〇第六十七集
 〇第六十八集
 〇第六十九集
 〇第七十集
 〇第七十一集
 〇第七十二集
 〇第七十三集
 〇第七十四集
 〇第七十五集
 〇第七十六集
 〇第七十七集
 〇第七十八集
 〇第七十九集
 〇第八十集
 〇第八十一集
 〇第八十二集
 〇第八十三集
 〇第八十四集
 〇第八十五集
 〇第八十六集
 〇第八十七集
 〇第八十八集
 〇第八十九集
 〇第九十集
 〇第九十一集
 〇第九十二集
 〇第九十三集
 〇第九十四集
 〇第九十五集
 〇第九十六集
 〇第九十七集
 〇第九十八集
 〇第九十九集
 〇第一百集

見巧去

見巧去

見巧也

17

二の母の事
さもあんな
振りのあんな
あんな事
はあんな

の二子よく出ふられしを ○ 濱あり情よくあれしは作

まの初もそれい忠臣孝子のまに溺るゝ河れとけ姫の作に
かきりてそ難をよくのかれてまもぬれ場の情婦あり

○ 伝乃ら旅立の辰暮六丈母、朝倉保させし別離の
行あくして好之 ○ 又濱あり初、そも密又、情よくやわ

れ濱あり情よくや 信 言く信、まへ易く心を付て加れしり
○ 在母二つを今坂、寝店らま、信くく、いらにとあふり

濱あり密母思ふりあつみの若、擔人しる寝店ら子、濱あり
害され乃、爺いま、実母の仇、寝店ら子を付あれし若

思、意、被、理、め、り、也 ○ 頼、花、ら、信、祇、ハ、理、今、信 子、ら、存、せし

見巧也

理評

無如と云
の評は
かきりて
文より
見巧也

見巧也

○ 某が羊、祿の毒酒、は、○ 某が六丈母の頼、頼さる振

を、か、え、ぬ、人、か、あ、この滑、藝、ま、て、宮、い、ら、思、を、り、か、村

百丸のま、ち、う、ひ、ま、て、丈、母、の、の、害、さ、れ、さ、る、者、官、を、
心、さ、さ、る、よ、子、の、弟、力、絶、妙、と、頼、花、ハ、社、平、店、ら、こ

評、ら、れ、て、あ、と、ま、を、是、ま、お、夜、う、ら、ぬ、死、骸、の、乳、被、言、院、
か、き、り、て、結、納、の、お、を、め、て、澄、と、せ、ま、ら、い、ら、う、○ 妙、子、に

信、事、ま、一、は、信、乃、り、存、命、ま、ら、ん、ま、ら、ん、是、ハ、後、辰
は、新、織、肌、を、又、う、小、文、又、う、宅、へ、踏、込、ぬ、下、あ、ら、ら、る、こ、こ

北、新、雨、あ、く、○ い、さ、ら、の、初、と、ら、免、と、い、れ、と、白、雲、の、跡、
十、日、日、の、雨、あ、く、これ、と、ま、て、ま、て、或、は、る、あ、る、もの、も

見巧者

カキヤ
カキヤ
カキヤ
カキヤ
カキヤ
カキヤ

見巧者

の石子房を歌しける感んく

面白く ○ 四十六回の終り道常三人の雑言を多くおし

るさゆよく出れり ○ 若き若く將士教に高産のたより

を引ける我身を恥さるものこしこれいひ及る云せり

○ 陰鬼湯人の顔向安子早常より最情高きことへて終妙

くか歌のゆれこれ又新あきて妙 ○ 世道世道の秘虫の輝と

世道世道捕り子の共いあまあふいあ舞妓めれこれと浮世軍談

就過り川系の高院を切落しける同くしてた文の花

あるへ ○ 第六集並にけり恒家へ辰船おる風情風情なるく

うつりゆりまの暇の終の辰小文より並にを介抱れとこ

見巧者

見巧者

海第七集の富野官山此辰とけ第九集ふ思ら池の辰
三方ともよくうつりゆりまの暇の終の辰小文より並にを介抱れとこ

○ 世道世道の終りより世道世道の初へりけて毛羽ら身の上を

おせ、物説らせり仇非のありこれと物語ををふらん又

おせり息法に、業をのせりとゆり金の庫の弓袋の辰は

煽扇のまき前かといひて世道のりりめを顔向すたるい

精ひーおるを石を拾ひ伸するもよして枝をくふすりさ

ぬ筆のまきり記也 ○ 毛羽信の二人の女子のまきりよく虫

かより鈴りのくおるむねを時なるといひ誰もの付も

のふりまをゆりて小文又をころろと信辰巡り記のうせ九

と伺くして淫奸の境をのうれて去るもぬれ場のわら
 みをこれに作者の一流まで他作に見るぬれ目○戸
 板子より死さぬに使家傳の評にこり強酒りの疑向新
 舟の船まで毛髪ふ又ふ別れくありて審官に氣
 をのほせる妙○雛衣の自害杖振の吟詠よく出
 分りり氣を付てんるへ○第七集能一角の熟生
 現八の藤ふへ新打れ戻船をう蒲葉の温をこころ
 とくる中巨鹿の平をうよりお通くして甚よ
 ○猶より流るる難回を野路くそくくつざとあら
 すして妙○山猫の妖怪言むまで信れくるのこもて

則是作者の

真面目

言も知音

心伝ふに真

ありてこそ

女形と株の

中心こそ

言の神

い首安んせされい牙以命死骸まで獲せしめる
 又十減の祇より玉のおはあそふ分もすうぬ出さぬ
 ○留戀の者の辰雨の矢先を雪の指さくよく熟中
 の又ふをのうれて去るも大蛇おりこまは淫志の一流にて
 淫奸の私情を通するもの悪人あきらむるいあしんも
 他作に勝り也○お東介の雨作始終着友に板をか
 かさする妙○ほと追放せられてその性方定らぬハ
 第九集上巻の強こんこるをもそれうとあま別人あれハ
 さいめて後より出へられと今こんこぬふり記○
 本工作ら死骸の祇志は花の身と情とい言板よく出

作中の事
あつた事
精神
早あつた
あつた事

れう ○ 浮城を去後二人こころは妙又七をくら
姫達の事七室の押指を付ははくもの前の産ゆ
幼少の姫を女に親を傍り書あるよを宿友あせ
ぬるに二人の姉妹は及長八庄介小文又書きて
二人の妹は及大角鹿鹿が書あるへ ○ 指月院にて信乃
及帝國守の罪ゆゆを恐れむして後あつた事
してよ解しんれき因書あふん丁をいひて早く
を去るる凡人の及ぬ後傑の氣性をよく出する
ものうれ ○ 野牛の七物語等力妙八集旅人を
女按摩の語向すすして小説を作るそは上下あ

見ゆ

見ゆ
老松
神

作中の事
あつた事
精神
早あつた
あつた事

書をよく出するを志の信者といふに桂川の馬鹿を
昔八丈の杖あを妹脊のつ松の油をあととことけり
あつた神の信はよく書を付て左の念むぬ
後達の樵夫油をの橋これよく心をいひしり
○ 小文又る服疾唐申堂にて庄介ら船を助けける
宿友をもつゆりせるま妙 ○ 酒麴子かかれ家の辰
庄介らとぶに宮八を橋めしと記両を減ら造りし
荷をもともあつた事
川の弱の字と定級の雪を向さるるは切
ころにんそへの秋家の志るして漂泊のありうす

世多し。○ 過ぎの趣向他作も阿れとも老山権記の
 おその忠臣備江のおもえ多くは孝女貞婦あれはそを
 過ぎ、おととへそ身は汚さずともそは汚れた
 れは祇るれゆをけさるゝ弱はそれを忠かして賊婦、
 くるは新妻之挿後葉のそ母を悪人の子に、こも同、
 主之妻んおの海流そ河婦、う、年、う、志、とおの
 一、こは山之他作、孝女貞婦、あ、ね、若人なり、新妻、
 類あ、せん、ぬ、○ 船中、死、自、省、官、を、恨、ん、さ、は、侍、上
 舟の、**桐**、目、前、地、獄、牛、鬼、の、趣、向、新、妻、の、結、妙、之、○ 姨、肉、の、身
 神、子、を、捨、子、戸、を、ま、つ、一、信、乃、う、婆、娘、一、こ、も、あ、さ、る、海、流、

所、行、く、と、片
 行、の、こ、も、を
 名、を、も、と、
 新、妻、の、後
 任、り、の、ゆ、
 之、を、抱、腹、
 之、を、こ、も、
 我、方、に、改
 子、を、捨、て、
 舟、中、に、
 と、ま、り、

く、の、お、う、を、う、け、ぬ、省、官、い、あ、く、り、○ 第九集上候、珍、の
 お、の、辰、孫、連、り、又、を、極、虎、う、首、級、て、文、と、あ、は、い、
 眼、つ、ぶ、一、こ、も、あ、さ、る、毛、理、う、ま、さ、る、記、を、あ、一、て、妙、之、○ 又
 十、子、落、城、の、辰、吉、如、を、狗、痛、て、お、合、さ、う、侍、ゆ、一、信、乃、り、
 腰、苦、難、ま、て、刃、を、繕、ひ、及、音、を、練、免、て、降、卒、を、免、
 壁、出、し、て、米、錢、を、お、一、こ、も、あ、の、草、旗、の、雨、作、牛、尾
 慶、ハ、こ、も、あ、一、こ、も、あ、○ 間、川、玉、の、條、下、こ、り、れ、こ、も、あ、後、海
 虫、非、玉、傳、こ、も、あ、一、こ、も、あ、こ、玉、の、り、す、へ、て、山、海、經、神、は、大、經
 の、新、唐、の、出、り、外、雨、の、り、を、あ、一、こ、も、あ、一、こ、も、あ、一、こ、も、あ、
 あ、ま、り、あ、一、こ、も、あ、一、こ、も、あ、一、こ、も、あ、一、こ、も、あ、一、こ、も、あ、
 穿、袴、を、後、了、諦、を、し、ど、比、喩、し、て、人、を

鬼

猪河
一に
保を
鬼

戒めして菊の依の**五**双彦五居この君川玉の歌あるへ
その也五ハ神吳経五歎ふ孝ふ忠の文字あは玉河りい
に卯玉あるれいとて人の歎文字あは人やげ一るて知るは
是れり或曰第九集ニ怪鬼神怪吳甚多一怪吳人
多記ハ依り易くもや一曰これ依志の深まを知らぬ
偏之け虫の毒象を推評するハ此也玉仕ありて一連
の豫教とありそをもめてお士の牙をあつふ病ハおは
河とあくて玉の文字も消えつてあ玉とありて虚を
へ飛さるあといへる彌向あるんういらにとあは人々生れ
ゆゑんのお玉ハゆまて文字あはれのこれハ人情の私

鬼
異
拘
又
別
男
世
女
向

ありてふ忠ふ孝に對しての忠孝の文字おれい玉は
文字のあうまハ忠孝忠孝厄難も文字とととと消除
て大毒象にいされるなるんこつに眼をつらて見れハ
鬼神怪吳を虫いしし依志の深まをううひひて從
政を死せよと求めしる御儀とい同日此讀あはるるを知ら
るへ起り使者傳の活人仲もあせ刀刃の害いさ依け玉の歌
あはへ

從中快下後の抄評あれとも遊て四鏡をいへくも

八女傳略評終

十一 さい 昔年三歳

是下京師の書買返を勅さるる評おこ讀の爲の點老人
今義春の比ふり又答せしやとてかこされよふさまも
て京の由りあまみま又大の物さるるまことめく交相
よて累評一紙とあそりうけ評おこせれとる自者略し
ふりきり釋史をその精細るあの方あてしゆりも亦
其見の知音といひまう

成成夏六月念六日

著作堂老逸

